熊川宿　＜福井県＞　若狭から京都へ　鯖街道の宿場町

まちあるきの考古学

近くのまちあるき　福井

古代から平安時代まで、海の幸に恵まれた若狭国は、朝廷に海産物を貢いだ「御食国(みけつくに)」でした。

平安時代以降は海路の要所となり、大陸や朝鮮半島、日本海沿岸各地から数多の文物が若狭国から京都に運ばれたようです。

江戸時代、小浜藩は京都に通じる街道沿いに宿場町熊川を整備します。
熊川宿は、近江に入る峠の手前に位置し、いまなお、昔ながらの町並みを保っています。

近年になり、この道は「鯖街道」と呼ばれるようになりました。

若狭湾で水揚げされた鯖に、一塩して、夜も休まず京都まで運ぶと、ちょうど良い味になる、といわれます。

ただ、鯖ばかり運ばれたわけではなく、北前船から荷揚げされた海産物や近海の魚、塩などが、熊川宿を通り運ばれていったようです。

熊川宿はきれいに修復保存され、街中の用水の川音が訪れる人を迎えてくれます。

修復保全のすすむ　宿場町のまちなみ

新築住宅にも煙だし

茅葺き家屋も残る

旧逸見家住宅　江戸末期建築

旧問屋の倉見屋　文化八年建築

妻入り町家がリズミカルに並ぶ

熊川宿地図

熊川宿が栄えたのは、小浜藩の庇護のもとで、街道が若狭から京都への主要な物流ルートになっていたためです。

しかし、所詮は牛馬や人力での輸送。
明治時代、全国的に鉄道網が発達するにしがたい、町は寂れていきました。

町おこしは昭和50年代から始まったようです。
平成8年に伝建地区に選定されたことを契機に、江戸時代からの伝統行事を継承するなど、活動が活発になったようです。

街道に沿って用水（前川）が流れ、家屋が軒を連ねる典型的な宿場町の町並みです。

家屋は二階建て、平入り・妻入りがまざり、茅葺きの家屋も見られました。

ツシ二階で木爪型の虫籠窓や煙だしをもつ家屋も数多く、江戸時代に建築されたものも多いのではないかと感じました。

断層谷に沿う　鯖街道　　少しマニアな地理の話

鯖街道は、断層谷を流れる河川に沿って京都と結ばれています。

若狭湾は、日本海側では珍しい大規模なリアス式海岸です。
そのため、湾岸沿いには、断層谷が埋設された狭い平野が数多くみられます。
その中で、最大のものが小浜平野です。

鯖街道は、小浜を起点とし、小浜平野を流れる北川に沿って内陸に進み、熊川宿を通り、峠を越え滋賀県に入ります。

滋賀県朽木からは、花折断層谷に沿って京都に進みます。
花折断層は活断層で知られています。
大規模な地震を起こすたびに破砕帯が発達し、浸食されて谷ができています。

鯖街道は、滋賀県と京都府の境界で花折峠（分水嶺）を越えます。

峠から滋賀県側に北流するのが安曇（あど）川で、琵琶湖に注いでいます。
京都府側に南流するのが高野川で、八瀬大原を通り、京都に至ります。

峠は分水嶺のため、河川浸食されずに、険しい地形のまま残りました。
峠は破砕帯の粘土で滑りやすく、旅人にとって難所だったようです。

やっと峠を越えるとき、記念に旅人は樒（しきみ）の枝を折ったことで、仏教で樒を花というため、「花折り峠」の名がついた、といわれています。

まちあるきの考古学　　ホーム